

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

村山から天神へ向かい、猿田彦神を右手に見る。

その手前を左に折れると、含蔵寺の門前が出る。

此処は、国鉄高森線開通前までは本線道路でありました。

当時の高森は、此の地から見るに、山村酒造より左手に家々も集中し、賑わいをみせていました。役場から商店、旅館、そして映画館もありました。

神社・仏閣のたぐいも多く、山手にかけては、古来よりの高森の人達の住まいがありました。

此処から左手に折れるのは、往時の賑わいの証だったのでしょ。

大分圏と言われるに等しく、特に本町の経済面をささえた多くの人達が、此処を行きかっておりました。まだ私が幼い頃、定期的に行商のおばちゃん、大分県竹田からやって来ていました。

祭りの裏方を取り仕切っていたのは、大分からの人達でなかったかと思えます。

昭和三十年後半より、その大分からの行商の人達の姿を見る事もなくなりました。

それは日本が経済成長に入った時期でしたし、熊本市方面へ行く道路網の整備が始まった頃でした。

今思うに、高森に限らず阿蘇の住民にとって、様々な面を含めて熊本県人になっていった、その時期が、昭和三十年代であったのだらうと思います。

今はほとんど大分との繋がりを失くした、高森町。本町の礎として見るべきでしょう。

含蔵寺の門前に、古くから居を構える三森家。高森伊予守と共に壮絶な最期を遂げた、三森兵庫守の一族であります。

含蔵寺は、本町では最も古くから

存在し、その眼下に弥生時代に栄えた「幅・津留」遺跡があります。その「幅・津留」遺跡は、弥生時代までの形を残し、次の時代の「古墳」時代には無くなります。

佐賀県にある「吉野ヶ里」遺跡より規模からしても大きく、出土する土器類は目をみはります。

この「幅・津留」遺跡は、無くなるのではなく、発展し場所を変えていったのでしょうか。

含蔵寺から右手別所の堤にかけて、祭司の場所でありました。



▲含蔵寺（高森・上在）

旧高森中学校建築時に出土した遺物は、時の多大な指導者の持ち物でありました。

草部・吉見神社周辺からの出土品との関連は、やがて阿蘇家創設へとつながります。

その遺品は今、含蔵寺に保管されています。昭和二十三年旧高森中学校建築時に発見された、古墳時代の「刀・剣」の類いです。

「幅・津留」より発展し、豪族として指導者として高森人の基礎を築いた、先哲の遺品でありましょう。

含蔵寺の周辺には、上色見前原出身の人達が多く住んでいます。

農地解放前までは、広域な畑地を所有していた含蔵寺は、裏手に蔵があり、収穫時には牛馬に積んだ穀物がおさめられていました。

ひどい「ヨナ」害にあえぐ人達。当時は「ヨナ逃げ」と言って、あまりにもひどい「ヨナ」から逃れるために、含蔵寺周辺に移り住むのでした。